

令和元年度（2019年度）第2回
北海道史編さん委員会社会・文化小部会議事録

日 時：令和2年（2020年）3月31日（火）10:00～12:15

場 所：北海道庁本庁舎7階 共用会議室C

出席者：小内小部会長、秋野委員、荒川委員、小内透委員、角委員、菊地委員、櫻井委員、中澤委員、羽深委員、林委員、松本委員、吉岡委員

事務局：靄原室長、伊藤主査、山本主任

1 開 会

2 議 事

- (1) 各委員の進捗状況報告及び
掲載候補資料（案）の構想発表について
- (2) 今後のスケジュールについて
- (3) その他

3 閉 会

1 開 会

【小内小部会長】

- ・2019年度第2回道史編さん委員会社会・文化小部会を開催します。

2 議 事

(1) 各委員の進捗状況報告及び掲載候補資料（案）の構想発表について

【小内小部会長】

- ・本日は、最初の掲載候補資料の構想を各委員から提出いただいたので、それに基づき一人5分以内で、目次順に報告してもらおう。
- ・まず資料2-1、私が担当する「農漁村の生活」について。4期に分けて、このようなことを考えているということで、わかりやすくキーワードを付けた。
- ・1期目は貧しさとの戦い、生活改善、新生活運動、これは農村に限らず都市も入っている。農村にとって電化は非常に大きな意味があったし、1960年代に入ってもまだ未電化の地域があったということも含めて取り上げたい。公的な資料のほかに、できるだけ住民の声、実際の動きを明らかにしたいので、生活改良普及員の手記を載せている。2番目が「新生活建設提要」にある公的機関からの説明、次に普及事業を3つあげた。その1つ目が普通の農村から、空知の稲作地帯の女性による生活改善運動、2つ目に漁村の生活改善運動、3つ目に開拓地域の活動を選んだ。
- ・ラジオの共同聴取は北海道の農村の特徴なので、一つ入れたい。電化の調査についても今後収集する。
- ・2期目の高度成長期になると、キーワードとして人口流出、消費生活、農業機械化、しかし機械化がすべて進んでいないので労働過重が起こってくる。それに対抗するために生活の社会化の試みや、インフラ整備が進む。また、家庭管理という、労働生活、消費生活の管理が進められる。
- ・掲載候補資料として考えているのは、農夫症と名付けられた慢性的な倦怠感・疲労の病気、また水田地帯を中心に、春の繁忙期に共同炊事が行われていたことを取り上げる。今後は、環境、健康管理、インフラの整備について行政側の資料を収集したい。
- ・3期のキーワードとしては、高齢化・過疎化、それから環境ということが言われるようになるのと、女性の問題が農村女性についても言われるようになり、施策が進んでいく。また後継者・嫁不足問題、女性の地位向上のための家族経営協定なども進められたので、関係する資料を今後収集していく。
- ・4期の構造改革期のキーワードは、さらに過疎化が進み、限界集落化、超高齢化、また都市と農村の交流が言われて来るのでその辺りの資料や、女性政策・起業、6次化の辺りのデータを収集したい。
- ・この時期は農村女性のエンパワーメント事業や、グリーンツーリズムにつながる農村休暇法というのが出て来るし、集落を何とかしようと、農業・農村振興条例もできる。
- ・「買物難民」という本が出るのが2007年、道による限界集落調査が2011年と、2003年までに入らないけれども、そこにつながるような事も少し取り入れてまとめたい。

【吉岡委員】

- ・資料2-20、「炭鉱の生活」です。炭鉱は総合産業だから多岐にわたるが、最初からポイントを絞って書こうと思っている。前半は炭鉱がぐっと伸び、日本のために役立っていく時期、

そして高度経済成長期に坂道を転げ落ちるようになり、その後は地域をどう再生していくかと、大きくこういう展開かと思う。

- ・戦後の時期は、北海道博物館に日曹天塩炭鉱の資料がたくさん収蔵されている。天北炭田はカロリーも低く規模も小さい限界的な炭鉱だけれども、こうした炭鉱でさえ、この時期文化的な活動が起こっており、移動上映会や祭りの様子などが非常に興味深い。もう一つ入れるとしたら、60年代に向かって北海道の中でいち早く炭鉱に家電が普及していく、その様子を捉えられるものがあれば、伸びていく様子が伺える。
- ・1960年頃を境に下り坂に向かっていくと、生活がどう変わっていくか。ここも狙い撃ちだけれども、赤平の豊里炭鉱の小学生の作文がある。当時の佐藤首相に「炭鉱を潰さないでください」と直訴の手紙を書いて、「潰さないから大丈夫だよ」という首相からの返事が来るが、その半年後に閉山してしまう。書いた方はまだ生きている。
- ・子会社に分離して給与水準を下げるという動きが出てくるが、そういった資料も比較的残っているので1つくらい取り上げたい。
- ・炭住が1970年前後で大きく変わっていく、その一番特徴的なのは木造炭住から改良住宅に変わっていくこと。背景に鉱員の人手不足があり、職員住宅は木造のまま残されるが、鉱員住宅は変えていかなければ鉱員が定着しないので、苦肉の策で改良住宅法という法律ができる。給与住宅を改良住宅法で建てることについては、京都大学西山卯三名誉教授が注目していて、紹介されている。西山文庫から資料も入手しており、羽深先生のところと少し絡むけれども、炭住でのくらしがどんどん変わっていくところの資料を1つ取り上げたい。
- ・炭鉱がだめになったあとの、閉山による地域の荒廃、最後は炭鉱の記憶をもう一度捉え直してどう展開していくか。それらの資料は自分自身がやっていることなので、私の手元に全部残っている。

【小内透委員】

- ・資料2-8「都市化と都市の生活」です。以前にもお話したとおり、つかみ所がなく、焦点が定めにくい分野。ただそう言ってばかりいられないので、いくつか柱を建てて資料を探した。他の所と大分重なるところがあるけれども、それはのちのち整理していただくこととして、基本的には、都市化の様子、土地利用、都市の消費生活、都市問題などを念頭に置いて調べた。
- ・戦後北海道の都市を考えるときに、戦時中の北海道空襲が都市をめぐって行われたので、そこを出発点にした方が描きやすいだろうと考えた。これは角委員の担当する「終戦直後の混乱と生活」と少し関係すると思う。空襲のほかに建物疎開の問題もあって、建物疎開はその跡地が戦後問題になっている。
- ・町内会・部落会の扱いは、戦中と戦後で大きく変わる、その変化が面白いので少し取り上げる。
- ・米軍が進駐したことの意味は、いろいろなところで報告があり、様々な資料がある。
- ・住宅の復興の問題では、国の戦災復興都市計画の中で特別都市計画法が定められた。戦災都市を中心に傾斜的に復興を進めていく計画で、北海道では4つの都市だけが指定され、そこから都市の復興が始まる。
- ・都会では当然闇市が立ち、札幌の闇市が描かれることが多いが、他の都市も闇市がたくさんあって、そうした資料も取り上げる。
- ・大正時代に作られた住宅組合は、戦後も続いている、一つ面白い資料があったので使ってみたい。
- ・民衆駅という言葉があり、札幌駅が北海道では初めての民衆駅。国鉄と国鉄以外の民間の会社、

例えばステーションデパートなどが一緒になって駅を開発するということがあり、札幌のほかには帯広や旭川にもある。

- ・弾丸道路、馬糞を落としたらダメだという札幌清掃条例、あとはそれぞれの時代で特徴的なこと、例えば売春防止法の施行も、他のところで使うかもしれないけれども一応あげておいた。大型団地の形成、新産業都市の指定、町内会の連合会、公害防止条例、地下鉄と、本当に幅広い。
- ・最後の方で「通史」と書いてあるのは、年代別では書けないこと。都市人口の変化というのは、時期区分をしてもあまり意味がないので、統計的に作ってみたい。通勤通学、道路の舗装率、上下水道の普及率、清掃・廃棄物処理にも様々な統計があるので、それをこちらで集計して出したい。

【荒川委員】

- ・食文化を担当している荒川です。今回から協力員として元朝日新聞記者の秋野さん、それから特に伝統料理を研究されている藤女子大学の菊地先生を強力な協力員とし、サポートをお願いして整理している。資料2-3をご覧ください。どういう食の変遷があるかを示した年表がおおよそ出来ており、その中からピックアップして、1～4期のトピック的なことをキーワードとしてあげた。
- ・ここに盛りこまれていない部分、例えば戦前の食文化をどのように扱っていくかということについては、整理して扱っていききたい。例えば豚丼は戦前に生まれているが、戦後ブームが起きたものは取り上げる。
- ・1期は食糧難の時代で、栄養で言うと欠乏の時代だけでも、それにまつわるいろいろな話題がある。また給食がスタートしたり、小麦粉が普及し、それに伴っていろいろな製品が普及して、パンやラーメンが出て来る。ジンギスカンも広まってくる。
- ・生活に余裕が出来てきたのか、スイーツや飲料が結構普及しているので、それにもスポットを当てたい。他の先生の所でも出て来た電化製品の普及は食文化にも影響を与えているので、この辺にもスポットを当てていきたい。これらに関係する刊行物をあげている。
- ・2期は良い時代になり、特にインスタント系がずいぶん出て来るので、その辺りをクリアに出していきたい。あわせて飲料についても拡大していく。
- ・多様性が出て来て、特に洋食が広がってくることも明記しておきたい。またご当地グルメもこの頃にずいぶん誕生してきており、これも一つの文化になると思う。
- ・3期はインスタント、いわゆる簡便化が進むのと、高齢化が進んで健康が意識されてくるという流れが出て来る。カップヌードルが生まれたり、回転寿司、コンビニが続々と誕生してくるのをクリアにしていきたい。スイーツについても、ロイズチョコなど、この頃に北海道を代表するようなスイーツが誕生している。
- ・4期になると新しい食文化が続々と出て来る。例えばスープカレーや、再ブームになった豚丼ではタレが広がり、地ビール、スイーツもブラッシュアップされ、協議会も作られて盛り上がってくるということで、それに関係するものをあげている。
- ・今回は中間発表なので、さらに相談しながら精査し整理していく。戦前に始まっている食文化や、各地にある母村の食文化といったものをどうやって関連づけて整理するかは、課題として共通認識を持っている。

【羽深委員】

- ・資料2-15「住文化」です。収集した資料は、資料リストの20ページからのものに加え、札

幌市公文書館の北海タイムス社の新聞記事スクラップがある。大枠は大体、資料1枚目のようになり、資料の選択は網掛けの部分を中心に行っていく。

- ・公営住宅をメインに持って来ようと思って、道立文書館の資料を調べてみたが、聞き慣れない言葉がたくさん出て来た。引揚者住宅、入植者住宅、開拓者住宅、農山村漁村住宅、これらは建築学会でもほとんど知られていない部分なので、強調して書きたい。
- ・三角屋根については、道や供給公社が進めてきたので、この辺を軸にまとめていく。道立文書館の資料で図面もある。
- ・断熱気密技術の展開は、寒地建築研究所、寒地住宅都市研究所、北方建築総合研究所という流れを抑える。刊本を多く収集している。
- ・引揚者住宅は道民生部、入植者住宅や開拓者住宅は経済部が所管しており、本庁の建築部門は一切関わっていない。その後、土木部に住宅課や建築課ができ、また建築士会や供給公社、建築指導センターができるが、話を分けて書いた方がよいと思っている。
- ・それらに付随するものとして、戦前の軍隊の兵舎が引揚者住宅に転用された事例や、炭鉱の職員住宅が払い下げられて、各市町村で公営住宅に転換されていく話もある。それとは別に、明治以降本州から入植してきた漁家農家は、当初の住宅ではないけれども改築などをしながら出身地の住宅形式を保っていることが確認されているので、それらも加えようと思う。
- ・北海道にはかなり進駐軍の基地があり、特に真駒内のキャンプクロフォードはレンガの兵舎と家族用住宅として2×4が使われ、水洗トイレも完備されていた。すべてが本州から入ってきたわけではなく、米軍住宅からの影響についても加えた方がよいと思う。
- ・札幌市公文書館にある北海タイムス新聞社の記事スクラップには、団地のいろいろな姿が書かれている。公営住宅の家賃の滞納とか、すぐ雨とか雪解けになると下水道が全部詰まって汲取り式のトイレがあふれたとか、ほとんど苦情に近い記事ばかりあるので、その辺りをクローズアップしたい。
- ・民間については、本州から大手資本が入ってきて以降、宅地分譲や高層マンションが出来る。北海タイムス社のスクラップ記事で抑えればよいかと思う。
- ・2枚目は問題提起ですが、今回も4期に分けてまとめるということですが、住宅の部分では合致しないので、見直しをして欲しい。4期の区分は本州の区分で、北海道では成り立たない。

【林委員】

- ・資料2-16「保健・医療・福祉」です。一番最後に書き出してあるが、人口の推移、高齢化率の推移、離婚結婚の数値、妊産婦や人口死亡率、死因の順位、し尿処理の能力、ゴミ処理の能力、母子家庭の数、介護福祉施設の推移などは、作表して解説しなければならないと考えている。ただ、私の所でこれをやってよいかどうか分からない。
- ・医療や看護の教育に関しては、私がやってよいものかと思いながら入れた。
- ・戦後一番問題になってくるのは、食糧難や衛生、感染症の問題。GHQが何をした、道庁が何をした、という資料が非常に多くあり、そういったものの中から、まず戦後の衛生問題を拾ってみようと考えている。
- ・『新北海道史』では、何年に法律が出来た、改正されたということだけをただ追っただけで膨大な頁数になっており、戦後の医療・保健・福祉はまさに制度作りに追われたことがわかる。なんとかそこに歴史的な流れを積み上げたい、物語性を入れたいと考えており、そのためにはやはり1～4期と区切るのではなく、分野ごとにまとめていくしかないと思っている。衛生関係、福祉関係、医療関係でまとめると、これだけの頁数で足りるか不安になっている。

- ・女性の医療関係者の流れには、北海道の特徴がある。開拓助産師など、産婆さんの流れが近代的な法律制度の中でどのように塗り替えられているのかというところに、よい資料がある。
- ・人口の変化に伴って医療の需要が高まっていくけれども、北海道には無医村が結構あり、無医村への対応や医師・看護師の地域偏重が問題になる。看護師不足・医師不足は全国的な課題だけれども、北海道内の地域間格差の問題を取り上げなければいけないと思う。
- ・70年代に入ると、病院等で効率を生かしたいろいろな施策がスタートする。その施策も追いつつ、医療が北海道でどう進展したかというところに集中し、こんな科が始まったとか、こんな制度を医師会が始めたとか、こんな手術を初めて行ったということを追っていこうと考えている。
- ・「介護」にたどり着く前にも、行政的な措置としての福祉があったけれども、その措置としての福祉の話をし、最後に介護施設の話をしていく。

【松本委員】

- ・資料2-19「障害者運動」です。私の担当分野は、1～4期の区分にマッチさせてまとめていくことが可能な領域だと考えている。
- ・1期では、1949年に身体障害者福祉法ができる前後、傷痍軍人に対する施策の中で、北海道の人たちがどう動いていたかという辺りを見ていきたい。同時に、それまで障害者は「身体の不自由な人」として一括りにされていたのが、聾啞、肢体不自由と分離していき、それに伴って団体も出来る。ここにあげた身体障害者福祉協会支部もその一つで、当事者の会がすでに1期の段階で設立されている。
- ・障害者運動の中で大きな動きが北海道精神薄弱児育成会の創設。これは親の会で、入通所施設設置運動がここから始まる。育成会に行って資料は収集しているが、まだ詳細にはチェックしていない状況。
- ・2期になると、心身の障害者、児も多少含むけれども、者の教育・生活・就労保障が中心になる。それまでの時代は、障害のある人は児童も含めて家に居る、場合によっては厄介者扱いされるという状態であったのが、生活の場と住む場を確保しようという運動が進んでいく。特に運動として目立つのが、先ほども出た精神薄弱者の親の会で、新聞から拾ったものをあげている。
- ・一方で、コロニー設立運動が進んでいったのもこの時代。国からの働きかけで、主だった地域に1つコロニーを設立するという動きがあり、北海道の場合、1967年に知的障害の人たちのためのコロニーが設置されている。
- ・3期になると、1981年に国際障害者年があり、完全参加と平等ということで、本人たちが普通の人と同じ生活の実現、平等ということを中心に主張するようになり、親ではなく本人が運動を起こしている。それらの動きをなるべく辿っていこうと思っている。一つには、精神障害の人たちを中心に、1981年に「障害者の生活と権利を守る北海道連絡協議会」が結成されたこと。
- ・1977年には札幌いちご会が結成されているが、これは重度の身障の人達の団体。ホップも筋ジストロフィーの人が立ち上げた団体で、障害者本人が顕著に動き出したのが3期ということになる。
- ・そうやって動けた人たちがごく一部の障害者であったのが、少しずつ広がりを見せていくのが4期と言える。福祉サービスは2003年だけれども、措置から契約に変わっていくということで、選び取っていく福祉へと変化し、社会参加の充実と生活の質の向上ということで少しずつ動き出す。とはいっても、豊かな生活というにはまだまだという時代。障害のある人の生活は、引

き続き共同作業所でわずかな工賃で暮らしているという状況で、そうした現実面を明らかにして行ければと思う。2002年にD P I 世界会議が札幌で開催されたのを区切りとして、4期をまとめられるかと思う。

- ・また、1996年に母体保護法が成立するが、旧優生保護法によって優性手術の犠牲になった人たちが北海道にも何人もいて、実態はまだ十分に把握できていない。実際に訴訟を起こしたのは2018年になるが、それより前に関係者の人たちが声を上げていたのかどうかということも、少し辿ればと思っている。

【林委員】

- ・資料2-17「ジェンダー」です。最初は女性社会活動みたいなタイトルでしたが、ジェンダーに変えさせていただいた。ジェンダー関係は、『新札幌市史』が非常に充実しているが、頁数や項目数を考えてもそれ程詳細なものは出来ないと思う。また、今回他の分野ととても重なっているということがわかった。
- ・1期は農村の女性たちの頑張り重なっている部分が多いと思うし、あるいは炭鉱の女性たちの活動とも重なっている。そういった、どちらかという生業の中で、社会活動に目覚めて組織化し、声を上げていく。女性の政治家が登場したり、国際的な動きに対して会員を派遣したりといったことがあった。
- ・この時期に、生業上の組織化の共通項目がない一般の女性たちは何をしていたかというとなかなか資料が見つからない。それが見つかるのは、むしろ高度経済成長期に、母親が女性活動を始めたときだと思う。「婦人」という単語に絡みながら様々な動きをしていくが、その動きを日本なり北海道なりにもたらしたのは、どちらかという国際的な母親や婦人の動きだった。グローバルな意味で何をしようとしているかよくわからないが、単発的にそういったものに参加した人たちの報告書などがパラパラと出てくる。
- ・女性問題としてよく他県で扱っているのが売買春の問題。それもジェンダーで扱ってよいのかわからないが、資料としては拾っている。GHQの公娼廃止に関する覚え書きから始まり、売春防止法に至る流れ、そして風営法になりながら、実質的には売買春が行われているという流れも追っていく。
- ・ジェンダーのところでは一番記録を残したいと考えているのが、むしろ国際的なジェンダークオリティと言う概念に到達したあと、北海道がそれにどう乗っていったのかという部分。「婦人の十年」を超えて、5年ごとに世界女性会議が開催されるが、市町村ではそうした所に市民を派遣し、女性団体も派遣している。その流れの中で報告書が結構出ているので、その報告書の体験談を載せながら、この女性会議を2000年まで追っていく。
- ・ここで扱うべきか、福祉で扱うべきかわからなかったが、戦後寡婦の方や離婚した方に対しての社会的な扶助として、様々な施策が動くので、それも追っていく。

【角委員】

- ・資料2-9「終戦直後の混乱と生活」です。戦争のある意味余波ということでは、シベリア抑留、BC級戦犯、樺太引揚げ、赤坂修三の中国朝鮮人騒擾記録。それから北方領土の関係も、かなり新しい資料ではあるけれども、語りなどを掲載していきたい。
- ・緊急開拓などは、いろいろな要領や法律を見ていきたい。
- ・資料2-10「市民・環境・政治運動」では、1期もなにがしかの運動もあったと思われるけれども、そういった所を探すのは力不足というのがあり、高度経済成長期以降の資料をあげている。北海道で社会運動は、おそらく若干本州とはずれて、70年代の半ば以降盛んになるという

イメージがあり、このようなまとめ方になっている。

- ・具体的にこの資料を使うというのは絞り込めていないけれども、資料の9割くらいは集まったと自負している。恵庭・長沼関係の資料が道立図書館にあるので、今後はそちらをフォローしていく。
- ・林先生の女性との関係とは、少し棲み分けが必要になってくると思う。
- ・安定成長期の幌延の方は、当時の運動のリーダーの方にお伺いすることができるようになっていく。
- ・資料2-1 1「娯楽・レジャー・スポーツ」は一番弱くて、資料収集としては、道立文書館で札幌オリンピックやまなす国体関係については収集したが、それ以外はこれから努力が必要。娯楽・レジャーについては、全く調べが進んでいない。
- ・北海道のスポーツは何に代表されるのかを考えたときに、構造改革期には確かにコンサドーレや日ハムが出て来たけれども、それまでのスポーツを見たとき、いわゆる社会人、実業団のスポーツかと考えている。そのあたりの資料収集をどのように進めていくかが悩みどころ。

【小内透委員】

- ・資料2-6「自然災害と防災」です。自然災害は幅広いですが、地震・津波・火山の噴火・台風、それから自然災害という項目で出てこなかったが、冷害の問題がある。冷害は北日本特有の問題で、特に北海道は厳しいので、トピックとしてあげておきたい。
- ・1期では、十勝沖地震と洞爺丸台風。これは余りにも有名で、当時関わった人たちの手記がたくさんあり、そういうもので描きたい。事件があった概要と、実際に被災した人たちや救援した人たちによる手記あるいは作文は様々あるので、できるだけ交えながら作っていきたい。
- ・2期に入ると、冷害は何回もあったが、特に重要だと私が思ったのは昭和31年の冷害。昭和28年と29年、30年がなく31年と連続した冷害があり、これをきっかけに水田を諦めて畑作や酪農になっていく、そのきっかけにもなったので、このときの冷害を取り上げたい。人身売買の問題も出て来て、その資料もある。
- ・チリの地震と津波、十勝岳の噴火、十勝沖地震、最近になると有珠山噴火や石狩川の洪水。石狩川の洪水は子供たちの作文集があり、石が流れている様子を書いたりリアリティがある作文で、これは載せたい。南西沖地震は取り上げないわけにいかないし、たくさん資料がある。
- ・4期では2000年の有珠山の噴火。かなり昔からハザードマップはあったのに、クローズアップされたのは有珠山噴火からで、防災の意識が高まった。こういうものも使いながら、自然災害・防災は比較的まとめやすい感じがしている。

【櫻井委員】

- ・私の担当は資料2-1 2「宗教」です。資料は一応レジュメという形ですが、基本的に資料、公文書関係、研究した論文などを載せていて、戦後の北海道の宗教を探るのは極めて難しい事が分かった。各個別党派・宗派の資料に当たらないといけないが、まだ手が付いてないので、全体像がどうなるのかはよくわからない。
- ・時代の画期に関しては、宗教法人に関して言うと、おおよそ2つの期しかない。高度経済成長期に発展してきて、寺院であれば専業で、基督教会であれば牧師さんが食べられるようになってきた。それが2000年代の前半くらいまで続き、それ以降は緩やかに衰退期に入って行く。これは地域の人口減少、あるいは信徒・教徒の高齢化で、法人に集まるお金が減ってきたため。また葬儀がどんどん縮小し、家族葬、さらに直葬になってくると、寺院のあり方が根本的に変わってくる。

- ・ こういう流れの下に、宗教法人ごとの教勢、成長と衰退を跡づけるということになるだろうと思う。資料は、北海道の開拓期のもが多く、宗教法人に関する名簿も利用可能なものはちょっと時代が古い。
- ・ 宗教法人というのは、認証された時期と解散に関しては分かるけれども、解散する宗教法人は極めて少ない。いま全国に18万くらいあるが、宗教活動は営んでいないところが多い。北海道でも、各地域に非常に多数の教会が宗教法人としてあるけれども、実態としての活動は、大教会や分教会以外はあまりやっていないのではないか。
- ・ 新聞報道を2枚目以降に書いたが、仏教や寺院に関する記事はほとんどなく、神道や神社では地域の祭礼が主で、基督教に対しては非常に好意的。先ほど冷害の話が出たが、時にそういった支援活動を行った基督教会のことは書く。おそらく神社や寺でもやっているけれども、そこは書かない。あるいは砂川であった政教分離の訴訟は大きな記事になる。
- ・ 新宗教に関しては、昭和30年前後に創価学会が教勢を拡大し、夕張・空知で革新勢力と非常に対抗的な関係にあったことが道新で詳しく報道されているけれども、創価学会が教勢を伸ばしたのはその後で、そこに関しての記事は一切ない。
- ・ 後ろの方に研究論文や文献などを付けているけれども、戦前の頃がほとんどで、戦後の宗教の動向などに関するものはあまりない。
- ・ 今後の方針としては、各教派・宗派をお訪ねして戦後の資料に該当するものがあるのかどうか、そういうものを収集していくことになる。

【小内透委員】

- ・ 資料2-7「祭り」です。先ずどうしても取り上げないといけないのは雪まつり。雪まつりを出発点に、その後各地で同じような雪や氷の祭りが出てくる。それから、ピアガーデンの方で有名になっているさっぽろ夏祭り。
- ・ 高度成長に入って、北海道の祭りという概念が幅広く捉えられるようになる。冬の祭りと食の祭りがあり、食の祭りの先駆けが、昭和31年からの石狩さけまつりではないか。その後はさけまつりだけでもたくさん、それ以外にも農産物の様々な祭りがあり、リストアップするだけで大変。
- ・ 独特な祭りとしてはへそ祭り。それと高度成長期には冬季オリンピックがあつて、これも祭りの中で取り上げるのかどうかわからないが、一応ビックイベント。
- ・ 3期は「北海道の三大あんどん祭り」という言葉が作られて、それ以前からある夜高・八雲・ねぶたの3つを集めた。祭りの連携みたいなものはこのあたりから始まる。
- ・ 食の祭りでも、例えば肉の祭りは業者が仕掛けたもので、肉のスタンプラリーができたり、最近は麺のスタンプラリーなどもある。
- ・ 欠かすことが出来ないのは失敗した食の祭典で、これはいろいろな報告書が出されている。ほかにPMF、よさこいがある。
- ・ 4期に新しくできた祭りはなかなかみつからなかったけれども、小樽雪あかりの路。海外、特に韓国からのボランティアが参加してるので、少し様子が違うかもしれない。また三笠の北海道盆踊りが復活したのを調べたら北海道遺産になっていたもので、これも取り上げる。
- ・ 戦前からある宗教系・神社系の祭りは、入れないわけにはいかないけれどもどうやって入れるかが問題。特に、大きな観光資源にもなっている北海道神宮例大祭。もう一つ問題なのは、母村との関わりがある地域の祭りはたくさんあり、これはずすのはおかしい。民芸、踊りなどもたくさんあり、札幌大学の宮良教授が生涯かけて集めた資料があるが、どこまで扱うか考え

ている。

- ・90年代に、札幌の広報誌で祭りの特集をやっている、札幌の祭りだけで972あると書いてあった。とてもじゃないがリストを載せる事は出来ないし、どうすべきか苦慮している。

【小内小部会長】

- ・資料2-2の「メディア」です。まだ資料を集めている段階で、比較的1～4期にあてはめやすい項目。
- ・1期は新聞の復刊、ラジオ、有線放送、街頭放送がキーワードになる。戦中は北海道新聞に統合されていたのが戦後復刊されてきて、それについては道立図書館で地方新聞の目録を作っている。
- ・この時代はラジオが入ってくるけれども、電気がない農村ではラジオが聴けないので、農村型の有線放送が入ってくる。喜茂別への敷設が全国初で、北海道ではこれに力を入れていたので、是非取り上げたい。街頭放送は、信号機を待っているときにかかっているもので、今も北海道に8箇所残っていて、他にはない傾向なので取り上げたい。
- ・高度経済成長期はテレビの時代といえる。テレビが出て来て、難視聴の解消としてケーブルテレビが入って来るけれども、ケーブルテレビはチャンネルが多いため、それを使ってまちづくりに生かすような取り組みが出てくる。一番有名なのが池田町営の有線放送、民営では寿都で電気屋さんが今もやっている放送がある。
- ・高度経済成長期は、経済誌、総合雑誌という言い方もするが、『財界さっぽろ』『クオリティ』などの月刊誌が出るのが一つの特徴。また市民のメディアとしてミニコミ誌が出て来る。この時期のミニコミ誌は、政治の時代を反映していて、これを取り上げてみたい。ミニコミを集めている住民図書館というのが東京にあったけれども、閉鎖になって埼玉大学に収められていることがわかったので、行ってきたい。
- ・低成長期になるとケーブルテレビが続けて入ってくるのと、ミニコミ誌にかわってタウン誌というビジネスライクなものが増え、グルメやファッションにもつながっていく。これもタウン誌ガイドがいくつか出ており、そういったものを取り上げていきたい。フリーペーパーも、北海道の老舗として有名な、北見を中心とする「経済の伝書鳩」とか、旭川の「ライナー」がこの時期に出てくる。ブームはその後の時期になる。
- ・1992年にコミュニティ放送が制度化され、北海道にマッチしたメディアとして急速に広がっていくのが特徴的なので、取り上げたい。函館のFMいるかが全国第1号で、現在も全国300局くらいあるうち28局が北海道という状況がある。
- ・4期もその流れが続いていて、2000年にはフリーペーパーが最盛期になる。2000年まではテレビの時代と言ってもよいが、インターネット元年が1995年とされており、テレビを中心にこういったメディアも取り上げてみたい。ただ、民間が出しているこの種のものうち、どれをどう取り上げるかが悩みで、今後考えていきたい。

【中澤委員】

- ・資料2-13「文学」です。与えられている資料の数が限られているので、候補資料はその数に合わせて出した。北海道の文学運動の、いわば通史的な記述というのは、2期にあげている和田謹吾の著書と、3期では小笠原克、ほかに山田昭夫、木原直彦の仕事などがある。そういうもので戦後の通史的な記述は網羅されるけれども、それらは北海道の独自性を追求するというスタンスで書かれている。それに対して批判的なのが、1期にあげている『札幌文学』や『裸人群』で、北海道にこだわらず全国を目指すという動きが、戦後当初からあった。その流れは、

4期に分かれていく時代くらいまでは続いていた。北方性にこだわる小笠原克に対して、3期には後輩にあたる研究者たちが『異徒』で批判的な立場をとる。2期の柴橋伴夫の文章なども問題提起をしている。

- ・そういう流れを緩和するというか、高めていくという考えで北海道近代文学懇話会が作られ、3期にある私の文章であるとか、4期の小岸昭を中心とするグループが、相対化する動きとしてある。
- ・この流れの中で、2期の北海道文学展や3期の北海道文学全集の刊行、北海道新聞文学賞とか北海道文学館の設立がある。今は見えづらくなっているけれども、この対立を明らかにしていくことで北海道の戦後の文学がはっきり見えてくると考える。そういう意味で、資料数は少ないけれどもこの9点を候補としてあげた。
- ・悩ましいところは、これでは札幌中心になってしまって、それをどう解消していくかという問題がある。解説的なことで補っていくことになると思う。
- ・続いて資料2-14「映画」です。与えられている資料数が少ないので、更科源蔵の『北海道映画史』から抜粋していくという形を取らざるを得ない。ロケ地一覧、ロケ地調査は、資料にもあげた朝日新聞北海道報道部のまとめたものがある。そのほかにもいくつかあり、補いながらまとめていきたい。
- ・映画に関しても、どうしても札幌中心ということになる。ロケ地ということでは北海道全体になるが、それをどう解消していくかということが課題。

【林委員】

- ・資料2-18「漫画・アニメ」です。与えられた資料数は5つだけけれども、新聞を調べても、道の資料を調べても、漫画には一切ヒットしなかった。多分、次の北海道史が出来たときには、漫画とアニメはすごく充実させなければならない。今回はそこにつなげるものを蒔いておくことになる。
- ・漫画は中央集権化が激しく、北海道出身の100人以上の有名な漫画家たちは皆中央で活躍していて、昭和の時から活動している。でもその方たちに言及していくには頁数が足りないので、『さっぽろ文庫95札幌の漫画』で北海道教育大学の伊藤隆介先生が文章をまとめているので、そこに代替させていただく。
- ・ほかに、北海道で独自に起こった漫画関係の組織を取り上げたい。一つは、日本漫画家協会北海道支部が結成され、そこがうまくいわずに「ほっかいどう漫画集団」を作るので、その会報等に一つ資料を求めようと思う。
- ・労働資料センターの資料に、横井のびるさんという北海道の農民漫画家の本がある。北海道農業のいろいろな問題を一コマにしている、バックグラウンドの説明もよかったので、これを選びたい。また高橋揆一郎を会長とする「さっぽろ漫画人協会」が1969年に結成され、北海道新聞に連載し、その後、作品社から『北の道化師たち』という書名で出版されている。その中の北海道がらみのものを一つ選びたい。
- ・アニメに関しても北海道からビッグネームが出ているが、世界的に評価の高かった今敏さんの情報を入れたい。

【小内小部会長】

- ・ありがとうございました。欠席の委員の分は飛ばしてしまいましたが、その資料も見ながら、今出された問題について話し合いたい。一つは、時期区分に当てはまらないという意見が複数の方から出ていた。教育小部会とも話し合った上で、当面この4区分でいくと決まったものだが。

【羽深委員】

- ・本州の時期区分と北海道の時期区分は一緒だという意味での時期区分なのか、違いを強調するためのものなのか、それをはっきりしてほしい。住文化については全く当てはまらない。

【小内小部会長】

- ・羽深委員の資料では図を作ってもらっていますが、これがどういうふうだと時期区分がぴったりするのですか。

【羽深委員】

- ・難しいですね。少なくとも、高度成長期と言っても炭鉱は潰れる、北洋漁業はだめになる、どこが高度成長かさっぱりわからない。時期区分をするときには、いろんな研究をやって実証を並べて具体的な話がないといけない。

【小内透委員】

- ・私が思うのは、それぞれの事柄についての時期区分は、固有のものがある。ここでいう時期区分はもう少し全体的な話なので、それはそれとして置いておいて、それぞれの項目については自由に書いてよいのではないか。ずれがあったら、ずれがあるという書き方にすればよし、そこは我々の中心的なテーマではない。

【羽深委員】

- ・北海道をこういう区分にしたという間違っただけの情報を与えるのではないか。なぜこの4区分にこだわるのか。

【小内小部会長】

- ・読者にわかりやすくするために一応4区分にするけれども、例えば高度経済成長期といっても北海道の農村の人たちが豊かさを感じられるのは1960年代に入ってからで、それはそういう風を書く。時期区分は目安で、読者が読みやすい塊として維持しましょうということで、全国に通用するような区分を使うということになった。

【羽深委員】

- ・例えば、本州は縄文・弥生だけど北海道は違いますよと、そういうふうに明確に示してくれるのならよいけれども。

【小内透委員】

- ・先生がおっしゃったことはよく分かる。北海道は弥生時代がないとかアイヌ文化期だとか。ただ、戦後で北海道独特な時期区分を作るというのは、相当な研究を重ねないと出来ない。読者は時代を平面では理解できないので、とりあえずアバウトな形で、時代の流れがわかるようにすることが必要。それぞれの項目で画期になるところは違うので、それはそれで項目ごとに区切ってよいのでは。

【角委員】

- ・気になるのは、我々はどこまで時代区分を意識しないといけないのかというところ。

【小内透委員】

- ・あてはまらないところは無視する。それはしょうがない。けれど時期区分はないという話にしてしまうと、ややこしくなるし、いつの時代の話かということがわからなくなる。どちらかにきっちりしてくれという方が難しい。

【角委員】

- ・各項目の裁量という解釈でよいか。時系列で並べるのは当然だけれども、その中で1期から4期までの区分をわれわれは意識しながら整理しないといけないのか、そういう整理は一応ある

あると考えるだけで構わないのか、そこには結構幅がある。こういう区分が何のためにあるのか正直今でもわからないけれども、そんなに意識しなくてよいというのであれば、ああそうですかという。

【小内小部会長】

- ・今の段階ではそういうふうにはしか言えませんね。これとは違う時期区分を決めることはできないので、できないならできないなりに書いてくださいというしかない。

【角委員】

- ・困るのは、最後になって「やっぱり意識してください」と言われること。

【小内透委員】

- ・私が思うのは、読者が読んで面白いと思うとか、なるほどと思うのを一番優先する。そのときの一つの視点として、時期区分があった方がわかりやすいだろうというのがある。だからストーリー性とか歴史が流れていくというのが面白いというのであればそれでやって、読者が「そういう時代があったよな」と思ってもらえればそれで構わない。だからといって、今時期区分をなくせという話にはならない。

【櫻井委員】

- ・時期区分は日本の政策とかなりリンクしているけれども、そことリンクする領域もあれば、あまりリンクしないとか、アニメーションみたいな、ある時期から出て来て違う発展の仕方をするものもある。私が扱っている宗教は、経済とは一部関わるけれども、政治とはあまり関わらない。戦後をどう俯瞰するかは、領域を担当した者として書くつもりでいる。

【林委員】

- ・私も最初に言ったように、人口とか高齢化率といったこととは関係があるけれども、この時代区分とはあまり関係がない。最初にそれを提示しないと、多分読む人が困るだろうと思うので、一覧表として別に付けたいと思う。

【吉岡委員】

- ・読み手は戦後の75年全部を把握できないわけだから、1945年に終戦があって、1972年にオイルショックがあって、1993年にバブルがはじけるといって、大きな転換点で括ってあげたら読みやすい。炭鉱に関しては1963年の前と後で全く違うのでこの区分とあわないけれども、読み手の目印というくらいで。

【小内小部会長】

- ・そのような形で、とりあえず当面時期区分はゆるやかに考えていくということで進めてください。
- ・それと気になるのは、道史の歴史的資料とデータとは違うというのを、山本さんと話して感じるが、どうしても必要なデータは欲しいですね。

【事務局】

- ・産業・経済部会でも、統計データの話というのはよく出てくる。戦後については統計はたくさん種類があり、見られる状況にもあるので、例えば各巻末に統計資料として付ける意味があるかどうか。また他県史の資料編に統計データを載せる場合もあるが、それは白書など解説と一緒に統計が載っているもので、統計だけを載せてそこから読み取ってくださいというものではない。そういう統計資料の載せ方をしている。
- ・自分で作った統計資料ということになると、通史編の中で使われて、それが意味することが近くの文章でちゃんと書かれているという形になると思う。

【小内透委員】

- ・ということは、私の「都市の生活」のところで、市部・郡部の人口の推移を数字で示して、どれだけ市部の人口が増えてきたかを示そうと思ったのに、それは資料編では使えない？

「都市の生活」は、今回大風呂敷を広げていて、重なるところがあるから譲っていったら残るところは非常に少ない。残るのは公園くらいで、公園の資料は時系列の生データをもらっているのでインプットしていけば推移はわかるけれども、やる意味が無いか。

【事務局】

- ・通史編では使えるけれども、資料編ではないと思う。

【小内透委員】

- ・上下水道も時系列データはあるけれども、昔と最近とで指標の取り方が分かれて、途切れ途切れの資料しかない。共通するところだけを上手く合体するのは私がやらなくてはならないが、そういうのも通史で扱うということか。

【林委員】

- ・逆に、途切れ途切れの資料が有効なんです。話題にしたいデータを探したら2～3年間の資料しかなかったので、「これじゃ使えない、40～50年間のデータを作らなければ」と思ったけれど、それが話題になったときの表を文章と一緒に出せばよいのです。

【事務局】

- ・全体をなだらかに載せると言うよりは、これがこのテーマのトピックだという時期のものを抽出して見せる、そういうイメージだと思う。

【吉岡委員】

- ・下水の普及比率の違いという表ではなくて、「皆さん下水を付けましょう。蝇がいなくなります」というチラシがいいという。図面も資料になるのか。

【事務局】

- ・何にも加工しない図面は資料。

【中澤委員】

- ・資料の数とページ数が割り振られているけれども、実際に資料を掲載するのは抄録ということか。

【小内小部会長】

- ・頁があまる人もいるだろうし、やってみなければ分からない。教育もあるので最後はページの取り合いになるのではないかな。どうしても取り上げたいものは、とりあえず出しておいて貰った方がよい。

【中澤委員】

- ・解説も野放図に書いていいわけじゃないですよ。解説の中では、掲載に漏れた資料についても言及しなければならないことにおそくなる。

【小内小部会長】

- ・ミニコミ誌だったら、脚光をあびた重要なものを資料として取り上げて、通史編の本文中にはどういう地域にいくつあったとか、ジャンル別に数を示すようなことを想定している。

【小内透委員】

- ・例えば、よさこいの研究論文もいくつかあるが、その中によくまとめているものもあって、でもそれは第一次資料ではないのでだめだということになるのか。よさこいの実行委員会に行って「第1回の参加名簿というのをください」と、そこまでしないと一次資料なんて手に入らな

い。

【事務局】

- ・本当の学術論文なのか、よさこいについてよく実態を表しているような文章なのか差があると思う。一次資料ではないけれども、誰かがまとめた実態を表す資料でもまあ、よいのではないか。

【角委員】

- ・新聞雑誌は一次資料に近いけれども、学術論文になってくるとちょっと微妙だなと思う。

【小内透委員】

- ・新聞でよいのなら、面白い記事がいっぱいあるから、新聞ばかりになる。

【角委員】

- ・戦後の混乱期も新聞に頼らないとしんどい。新聞ばかりにはなるべくしないようにしても、やむを得ないところはある。

【小内透委員】

- ・公文書はいいわけね。でも公文書も一次資料と言えるかどうかわからないところがある。

【小内小部会長】

- ・公文書だけだと庶民の生活はなかなかつかめないなので、それはちょっと避けたいと個人的には思う。

【角委員】

- ・表が資料にならないというのはよくわかったけれども、解説の中に表が載るという形はありえるか。

【事務局】

- ・解説の中で表を載せるというのはあり得るけれども、ただ解説の分量もそれほど多くなく、1冊のだいたい10%程度と想定している。かなりコンパクトな表にしないと難しい。

【小内小部会長】

- ・予定した資料があとになって全部使えないということになっても困るので、迷ったものは事務局に問い合わせてください。
- ・各委員からの報告で、重なっているとか、足りないところとかが出て来たと思うので、意見・質問を出してください。

【小内透委員】

- ・角委員のスポーツのところですが、北海道ではゲートボールとか新しいスポーツが作られており、それもどこかに含めた方がよいのでは。また、障害者スポーツも北海道は盛んだと言うので、入れたらどうか。普通、障害者のところでは扱わない。
- ・小内純子さんの農漁村の生活のところ、戦中から始まっている拓北農兵隊のような集団帰農は含まないのか。

【小内小部会長】

- ・産業の方に入るのではないか。むしろ漁村の生活が、あまり研究されていないのでよく分からないところがある。

【小内透委員】

- ・林委員の保健・医療のところ、ハンセン病というのは。

【林委員】

- ・ハンセン病もエイズもスモンもみんな入っている。

- ・確認したいのが、農漁村の女性活動は小内先生が担当するので、ジェンダーからはずしても大丈夫か。

【小内小部会長】

- ・そうですね。生活というどうしても女性が入ってきて、減反のときに転作・加工してそれが6次化につながっていくとか、そうしたことを書いていくつもりでいる。

【林委員】

- ・炭鉱の方の女性はどこで担当するのか。炭鉱の女性活動はものすごくある。

【吉岡委員】

- ・炭婦協は書いている暇がないので、お任せしたい。

【林委員】

- ・炭婦協けっこう分量があるけれども、ではそちらは私が引き取ります。それから売買春は。

【小内透委員】

- ・「都市の生活」からお渡しする。団地も羽深先生に譲る。

【荒川委員】

- ・学校給食の扱いは前からの懸案で、教育小部会とどの段階かですり合わせる必要がある。
- ・今日資料を拝見してアイヌの食文化はどこにも出てこないの、こちらで扱うことになるか。炭鉱の料理なども出て来ていないので、継続性があるものについてはこちらで扱う。特にやっかいなのは教育の方とのすり合わせ。戦後の牛乳やら小麦粉やらのところで。

【事務局】

- ・学校給食は教育小部会で小中学校を担当する先生に取り上げる意向がある。

【荒川委員】

- ・こちらはこちらでさらっと薄くやっておく。多分、戦後の食文化で給食に触れないというのはなかなか難しい。

【小内透委員】

- ・視点を変えて両方で取り上げては。どちらも必要だと思う。

【小内小部会長】

- ・教育の方で看護教育・医学教育は入っていますか。

【事務局】

- ・確認する。

【林委員】

- ・「医療・福祉」で、医師不足、看護師不足と絡めることは出来る。

【小内小部会長】

- ・ほかに、どうしても確認しておきたいことはあるか。

【羽深委員】

- ・資料編には一次資料を載せて解説を付けて、通史編では資料編に載せたものを中心に叙述するというのか。だったら、通史編の思惑がある程度決まらないと、資料編の各分野の順位付けができない。

【事務局】

- ・資料編も通史編をにらみながらということになる。通史を書く上でこれは外せないということの典拠は資料編に載せるとか、そういう繋がりが出てくる。

【小内透委員】

- ・資料編のうち解説 10%というのは、我々それぞれに与えられている頁数の 10%と理解してよいか。

【事務局】

- ・全体で 10%なので、それを各委員でどのように割り振るかというのはまだ決まっていない。

(2) 今後のスケジュールについて

【小内小部会長】

- ・今後のスケジュールについて事務局から説明してください。

【事務局】

- ・資料 3 で資料編（社会・教育・文化編）編さんスケジュールというのを表にしている。資料編（社会・教育・文化）が刊行されるのが 2023 年度末なので、そこに向けてのスケジュールを表にした。
- ・資料調査は 2021 年 9 月までに終わらせ、追加調査も半年後の 2021 年度末にはすべて終了していただく。小部会は基本的に年に 2 回、9 月と 3 月に開催するという事なので、小部会の都度、掲載候補資料が精査され、資料調査終了の第 4 次掲載候補資料で、だいたい固まることになる。
- ・ただし、すべて決定したあとで入力するのは時間的に間に合わないので、かなり早い時期から、掲載候補になるものを出していただきたい。実際に掲載するときの 2～3 倍になっても構わないので、できるだけ早く出していただきたい。頁が多いと分かって次のものと入れ替えるとか、そういうことをするためにも、事前の入力作業が必要。
- ・2021 年度の 9 月には、解説部分の構想も固めていただいて、その後小部会・部会の中で内容調整が行われたあと、2022 年度の 6 月には解説部分の締め切りとしたい。

【小内小部会長】

- ・おおよその流れですけれども、質問はありますか。では半年後を目指して、完成度を高めていただくことが当面の作業となりますので、よろしくお願いします。

(3) その他

【事務局】

- ・国立国会図書館が GHQ 文書の複製マイクロフィルムを所蔵しているが、そのうち北海道関係だけを抽出して、複製を取ってきた。全部英文であるが、その要点を翻訳した目録が間もなく提供出来るので、是非使っていただきたい。
- ・編さん室の中谷主幹と、この部会担当でお世話になった山本が異動することになった。

3 閉会

【小内部会長】

- ・これで小部会を終わります。ありがとうございました。

(了)